

(四) 猫の狩り

少し前の話である。

日本で生まれ、もの好きな家族と一緒に飛行機でイタリアに行って4年半して帰ってきた猫のトラは、狩りが上手だった。ミラノ郊外の庭で、メルロという黒い美声の鳥を何羽捕ったことだろう。

それを聞いた向かいのフィンランド人が、ある日女房のところへ来て、猫をちょいと貸してくれないかと言う。車庫に50センチほどの巨大鼠（ねずみ）が出て、驚いた掃除の女性が金切り声をあげて天井まで飛び上がり、えらい勢いで車庫の戸を閉めてから、「あたしゃあのネズミがいる限り二度と車庫には入りませんからね、奥様」と息をはずませ蒼い顔で断言した、と言うのである。

「あら、いいわよ、お役に立てるといいけど」と、寝ていたトラが迷惑気な顔をするのもかまわず女房は抱え上げ、向かいの家の車庫へ入れて戸を閉めた。

30分後。

そうっと戸を開けてみると、なにやらキィキィ音がする。トラはちゃんと鼠を口にくわえていた。

お利口、お利口。

その鼠はこっちにちょうだいね。

まさか鼠が猫より大きい筈はなく、5センチほどの鼠は同じくらいの長さのシッポをぶら下げてキィキィ鳴いている。

「まあ、可愛い」

当時5歳だった下の娘が鼠を掌に載せ、小さな指でいとおしそうに撫でたので、清潔好きのフィンランド人はヒクヒクと頬をひきつらせた。

と、鼠は娘の指に咬（か）みついた。細長く鋭い歯である。

もの好きな夫婦のもの好きな娘もあわてて鼠を振り落とし、手を消毒してもらった。

あれから7年、猫は代替わりして2匹になったが、2匹のうちイタリア語で牛乳

を意味するラッテと名づけられた猫は狩人である。次から次へと捕まえてくる鼠が1種類でない。濃い灰色か茶色の尖（とが）り鼻に、丸鼻、焦げ茶薄茶白の3色と、3種類もいる。尖り鼻と丸鼻が多い。そして猫が鼠を弄（もてあそ）ぶように、というが、ほんとに猫はちょっと鼠をころがしては放ち、逃げかけるとまた咬む。その癖食べない。女房は猫に腹を立て、鼠を哀れみ、猫からとりあげて裏庭に逃がす。弱肉強食は残虐ではなく自然であって、人間だって牛も豚も殺して食べているのだ。だから食べるのならまだ許せるのだが。



こんなに小さな鼠の足音を誰も家の中で聞いたことはないから、みな近くの藪に住む野鼠（のねずみ）であろう。人の目の届かないところにこの小さな生きものはそれほどいるのか。人の知っている範囲なんて限られているん

だねえと、もの好きな女房は妙なところで哲学的になる。

別の日、書斎の本棚の後ろでガサゴソ音がする。

猫は2匹して緊張感漂う顔で、背筋を伸ばして傍らにじっと座って待っている。

何だ、これは？

2時間たっても猫は動かない。音は止（や）まない。

しびれを切らした女房が本を何段か抜いてみると、出てきたのは土竜（もぐら）だった。その毛皮のしなやかなこと、ビーズ玉のような眼の可愛いこと、短い手足についた爪の長いこと。小学生の子どもたちが帰ってきたら見せてやろう、と女房が牛乳パックに土と一緒に入れてやると、土竜はさらに3時間休まずガサゴソ動き続けた。女房はやかましいのに閉口したが、猫が襲ってはと傍を離れられない。



子どもたちは案の定（じょう）大騒ぎ。近所の子も何人か集まり、眺め、瓶に移そうとして、あ、逃げられた。モノスゴイ速度で土竜は穴を掘り地中に戻って行ったものである。

ラッテは鳥も捕る。雀に燕、鶺鴒（ひたき）に目白。片っ端から埋葬してやる庭が
広くて幸いというべきか。

ある日、傷ついて廊下でバタバタしている鳥を見て、愛鳥家のじい様があわてふ
ためいた。女房には何の鳥だかわからなかったが、「これは鶯（うぐいす）じゃ」
とじい様は言う。尻尾の短い、およそ地味な茶色がかった緑の鳥で、目白（めじろ）
のほうがよくきれいな「鶯色」である。「梅に鶯、と言うがの、たいてい目白を
見て鶯だと誤解しちよるんじゃ」とじい様は続けて解説する。確かに、鳴く鶯の声
に立ち止まって姿を探しても、藪の奥深く隠れてまず見つからない。鶯は声が派手
なわりに、見られるのを嫌う恥ずかしがり屋なのだ。

その傷ついた鶯を即刻獣医に連れて行け、とじい様が言ったもので女房は目を白
黒した。が、父親は本気である。目の白黒が元に戻らないまま女房が調べて電話を
してみると、2軒目の獣医が、ウチは県指定の野鳥保護医です、と言うので、はあ、
それでは、と連れて行くと、獣医は掌に鶯を乗せ、くるりと上に指を丸めて筒にし、
その中で小鳥にバランスをとらせた。どうもフラフラしているから、翼もだが脳を
やられているかもしれない、と診断する。預かってくれたが、2日後死んだと連絡
が来た。小さな命ほど、救い難（がた）い、と言う。